

第1回滋賀県多職種連携学会研究大会報告書

(旧 滋賀県連携リハビリテーション学会)

学会テーマ：自立支援に向けた多職種連携

開催日時：平成28年12月4日(日)

開催場所：栗東芸術文化会館さきら

学 会 長：猪飼 剛(一般社団法人滋賀県医師会 会長)

実行委員長：濱上 洋(一般社団法人滋賀県病院協会 副会長)

参加者 195名

開会式 学会長挨拶



基調講演

「自立支援に向けた多職種連携～地域で最後まで住み続けるために～」

土屋 幸己 氏(公益財団法人 さわやか福祉財団 戦略アドバイザー)



企画演題シンポジウム

「歩みはじめた多職種連携～私たちができること～」

○シンポジスト

- ・西村 一也 氏 (滋賀県介護支援専門員連絡協議会)
- ・大西 延明 氏 (滋賀県薬剤師会)
- ・清水 満里子氏 (滋賀県栄養士会)
- ・深津 千景 氏 (滋賀県社会就労事業振興センター)

○コーディネーター 黒橋 真奈美 氏 (滋賀県東近江健康福祉事務所)



表彰式

《学会長賞》

演題番号2

約2年の歳月を経て復職に至った高次脳機能障害者への支援

～多職種連携による関わりが効果的であった症例～

近江温泉病院 総合リハビリテーションセンター 坂下 浩平

《ポスター賞》

演題番号27

障害を持つ人の作業機械の共同開発

障害者支援事業所いきいき 外山 聖



閉会式

演題発表

分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
就労	滋賀障害者職業センター 岩佐 純	1	両側前頭葉損傷により脱抑制症状を呈し復職に至った1症例 市立長浜病院リハビリテーション技術科 田邊 信彦
		2	約2年の歳月を経て復職に至った高次脳機能障害者への支援 ～多職種連携による関わりが効果的であった症例～ 医療法人恒仁会近江温泉病院 総合リハビリテーションセンター 阪下 浩平
		3	就労・復職支援における作業療法士の現状と連携に向けた課題 滋賀県立リハビリテーションセンター 中井 秀昭
		4	ソーシャルワークとしての就労支援の成果および方法 特定非営利活動法人滋賀県社会就労事業振興センター 中塚 祐起
		5	特例子会社が抱く「障害者雇用」についての一考察 滋賀県立リハビリテーションセンター 乙川 亮

(座長コメント)

【知見1】自分達の考えは自分達が思っているほど一般的ではない
就労支援には異分野の職種が携わることが多い。各職種には理念とは別に日々の活動で培われた思いの蓄積が、さらには所属組織に固有の文化や価値観がありそうである。そうであるなら、変な誤解や無理な要求をしてぎくしゃくしないよう、それらを相互に理解する地道な取組みが連携の前提として必要になるのではないかな。

【知見2】異分野職種との連携にはトータルマネジメント機能が必要
高次脳機能障害の方の復職支援は、復職先の職場の受入状況によって院内職種の連携で円滑に進む場合と、院外職種との連携が必要な場合がある。近接領域の職種とは異なる分野の職種と連携する場合、ご本人の支援方針のずれや細かい情報の漏れが生じないように、全体をマネジメントする機能（バトンを渡しつつも切れ目がないよう併走するようなイメージ）が必要。この機能を誰が担うのかは固定的に考えるより、ご本人の状況を十分理解しており実際に動きやすい人が担うのがよさそうである。

分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
地域づくり	社会福祉士会 高田 佐介	6	当市の地域リハビリテーション事業における多職種連携の 取り組みと今後の課題 甲賀市水口医療介護センター 葛迫 剛
		7	肢体不自由児のレクリエーション活動やスポーツ参加の機会を 充実させるためになにができるか 滋賀県立成人病センター 石田 哲士
		8	えーなぁ明日香。そう言われる地域を目指して！ 明日香村地域多職種連携ネットワーク「つなぐあすか」 東川 信一

(座長コメント)

リハビリテーションにおいて、対象者の生活の場（地域）に目が向けられるようとしていることは評価すべきことと思う。現場で課題を読み取りまずは調査するか、まずは地域にはいって実践して深めるかの違いはあるものの、評価にとどまらず地域包括ケアを本物とすべく、実践を意識した取り組みを今後期待できるものと考えた。平成17・18年ころ滋賀県各圏域挙げて広域リハビリセンター設立してきた経緯がある。これもきめ細かな地域づくりの意味もあったと考えるが、甲賀圏域だけの発表にとどまった。県下各圏域の奮起を期待したい。

分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
院内連携	病院協会 齊藤 晃	9	急性期脳神経外科病棟における介護福祉士と看護師との連携
			市立長浜病院
			杉山 慎太郎
		10	当院回復期リハビリテーション病棟における多職種連携の取り組み ～カンファレンスの質の向上～
			市立長浜病院 リハビリテーション技術科
			梶谷 友基
11	当院回復期リハビリ病棟における運動器疾患患者のADLと 認知機能の関連について		
	医療法人医誠会 神崎中央病院 リハビリテーション科		
	石川 喜基		

(座長コメント)

急性期病院では治療の必要性から長期臥床を余儀なくされることもあり、治療が一段落したときには自宅退院が困難なほどにADLが低下し、回復期リハビリテーション病棟で自宅退院を目標にリハビリテーションを継続するケースが増えています。急性期リハや回復期リハを円滑に進めるためには、担当するリハビリスタッフ間の連携はもちろんのこと、院内他職種との連携も欠かせません。また、回復期リハビリテーションのために転院が必要となるときには病院間の密な連携も必要となります。発表していただいた三題は、スムーズな連携の必要性を再確認させられる内容でした。

分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
在宅支援	介護サービス事業者協議会 連合会 廣田 岳尚	12	訪問リハビリ初めの一步！ 大津市訪問看護ステーション 小野 真紀
		13	独居高齢者の生活を支えるために訪問看護師ができること ～多職種連携と自己決定への支援～ 医療法人社団よつば会 よつば訪問看護ステーション 鈴木 淳子
		14	歩行機能と包括的健康状態の維持・向上を目的とした 在宅高齢者に対する鍼灸治療の1症例 明治国際医療大学 保健・老年鍼灸学講座 江川 雅人
		15	40年後の世界～多職種による精神障害者の地域支援～ 株式会社N・フィールド 訪問看護ステーションデューン草津 中程 健太

(座長コメント)

本セッションでは在宅支援に携わる各職種からの事例発表がなされました。

12. 訪問リハビリテーションから、本人支援はもちろんのこと「在宅で頑張る家族」を支えるためにも関係する機関との連携が有効との報告がありました。

13. 訪問看護師から、通所リハビリテーションとの連携を図り必要なタイミングで必要な支援を行うことが、住み慣れた地域への参加につながった事例の報告がありました。

14. 訪問鍼灸師から、担当ケアマネジャーや医師に経過報告を行うことの有効性が示されました。

15. 精神保健福祉士から、25年ぶりに在宅生活を送ることになった精神疾患の方に対し、訪問看護ステーションが関係機関との調整役を担うことにより、それぞれの専門性が発揮できる可能性が示されました。

4演題ともに、今後さらなる連携の形を模索する必要性を感じているという点で共通しており、その点が非常に印象的でした。

ポスター発表

分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
多職種連携	保健所長会 荒木 勇雄	16	リハビリテーション従事者における入退院時の連携について 滋賀県立リハビリテーションセンター 乙川 亮
		17	多職種で取り組むポリファーマシー 甲賀市立信楽中央病院 宇野 孝志
		18	当院回復期リハビリテーション病棟退院後の追跡調査 ～脳卒中地域連携パスを利用して～ 市立長浜病院 岩根 隆宏
		19	当院医療療養病棟における終末期の取り組み 第2報 医療法人 恒仁会 近江温泉病院 中野 奈菜
		20	看護師と療法士の協働による患者の日常生活自立への取り組み 公立甲賀病院 植野 勉

(座長コメント)

多職種あるいは単職種間の連携による入退院患者のQOL 向上への取り組みが報告された。入退院時情報提供、入院患者の定期的アセスメント、地域連携パスの利用、デスカンファレンスなどの場面で、リハ職、看護師、薬剤師、医師、介護士等による連携の重要性、有用性が示された。

基礎的調査によって必要とされる課題を明らかにするのが第一段階であるが、明らかになった課題の解決に向けて具体的な目標を設定して単職種あるいは多職種が協働して取り組むことが必要であると気付かされる。そういった実際の取り組みの中から、ここで示された成功体験あるいは失敗体験を通じて、単職種、多職種間の連携がさらに進み、患者、住民のQOL 向上につながることを期待できるのであろう。

ポスター発表

分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
保育・教育	作業療法士会 天田 美恵	21	学校と医療の連携について ～滋賀県立草津養護学校の取り組みより～ 滋賀県立草津養護学校 土井 義久
		22	滋賀県長浜市における児童発達支援事業と病院の連携 ～児童発達支援スタッフと医療スタッフによる連携～ 市立長浜病院リハビリテーション技術科 山口 卓也
		23	人工呼吸、胃ろうのあるAちゃんが姉Mちゃんと同じ保育園に行くために 滋賀県看護協会 訪問看護ステーションみのり 辰己 麻美

(座長コメント)

- ・養護学校で自立活動専任教諭として①医療の場に足を運び、児童とご家族が見える形での連携②その医療との連携をさらに校内で学級担任教諭が見える形で実現されるという今までにない取り組みがなされ、今後の発展と継続を期待致します。
- ・長浜市での市立病院と児童発達支援センターの連携は、互いの専門性の違いを研修会を通じて認め合いながら、是非、子どもさんとご家族を交えたカンファレンスで主体的に「地域で生きる」支援につないでいただきたいと思います。
- ・医療ケアを要する子どもさんの就園には多様な人々・機関・職種との理解と協力が不可欠であること、それをどのように丁寧に進めてこられたのか、この事例での取り組みが今後続く礎となるでしょう。

ポスター発表

分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
地域活動	社会福祉協議会 平 芳典	24	滋賀県JRATの熊本地震支援活動と今後について 済生会滋賀県病院 中江 雪枝
		25	介護職のためのリハビリセミナーを開催しての一考察 ～内部障害チームの取り組み～ 滋賀県立成人病センター リハビリテーション科 山田 理沙
		26	地域に参加の場を ～東近江リハビリテーション風船バレーボール大会の取り組みから～ 医療法人恒仁会 近江温泉病院 多田 眞理子
		27	障害を持つ人の作業機械の共同開発 障害者支援事業所いさいき 外山 聖

(座長コメント)

「地域活動」というテーマで4題の発表があった。

24 については大規模災害発生時の県外での活動ということで、今後益々その役割が注目されることになるが、県内の組織化とブロック単位の組織化が急がれると感じた。

25 については県内全域での取り組みで、患者の支援にあたり医療機関と介護保険施設との連携の重要性が改めて認識されるものであった。

26 についてはある圏域の取り組み紹介であり、報告された取り組みをさらに発展させて地域に定着させる工夫が課題と感じた。

27 については専門知識と技術を持つ工学分野との連携についての発表であったが、第二、第三の開発と今後は地域との連携も期待するものであった。

ポスター発表

分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
学生セッション	滋賀県立リハビリテーションセンター 野本 慎一	学-1	嚥下内視鏡スコア別にみる嚥下の特徴検討 ～咽頭内ピンポイントの所要時間の比較～ 滋賀県立大学人間文化学部生活栄養学科 佐藤 良名子
		学-2	頸部聴診音の特徴による嚥下評価の指標確立 ～嚥下音分析による簡易指標を目指して～ 滋賀県立大学人間文化学部生活栄養学科 松本 七海
		学-3	在宅生活する高齢者の膝伸展筋力と呼吸筋力の関係 滋賀医療技術専門学校 理学療法学科 米澤 穂波
		学-4	箱づくり法を用いた精神科リハビリテーションの多職種連携 滋賀医療技術専門学校 作業療法学科 大江 祐里奈

(座長コメント)

滋賀県立大学人間文化学部生活栄養学科から、療養者の低栄養や誤嚥を防止するため、食塊の貯留時間と嚥下障害に関する発表や、頸部聴診音による嚥下評価の有用性について検討が行われた。栄養士が誤嚥の防止まで関与する点で多職種連携に深く関わる可能性を示した。

滋賀医療技術専門学校理学療法科からは、高齢者の活動性の低下の指標として膝伸展力と呼吸筋力の関係を調べた発表があった。作業療法学科からは、箱の展開図を療養者に書かせる「箱づくり法」のデータを用いて、従来の評価法でなく療養者の生活改善のための支援方法を可視化した評価法を多職種間で共有した一例の発表があったが、今後の精神科疾患における多職種連携の可能性を示した。